

古事記の中の日本の心

自分は、大学の講義で古典の講義をとっている。その授業で扱った題材は「古事記」であった。「古事記」という名前は知っていたが、それを実際に読むのは初めてだった。授業では、その内容のうち、神々の誕生とその後の天地創造が扱われていた。神話というものは、自分はこれまで触れてこなかったジャンルではあった。しかし、一度読んでみるとそれはたんなる作り話であるというだけではなく、その話の中には昔からある「日本人の気質」というものを感じた。そのいくつかを、これから少し書いていきたいと思う。

まず、天御中主、タカミムスヒ・カミムスヒについてのことだ。授業では、「天御中主は混沌として一体であるものを分ける神で、この神のおかげでそれぞれがそれぞれの神として独立しうることが保証され、結果それぞれの神が個性を有することを保証される。そして、高天原は神と神との間の結びつきで構成される世界であるため、タカミムスヒ・カミムスヒはその結びつきを保証する神である。」と話されていた。そして、「これらの神々は最初に現れたとされ、高天原を構成する神」とも話されていた。

このことについてまず興味深いことは、それぞれの神が独りで突然現れたとするのではなく、まず神々の存在を保証する場の生成を考えているなど、あくまで理論的に説明していることだ。「神は自分たちにとって手が届かない崇高な存在なのだから、何でもありなのだ」という乱暴な考えではなく、自分たち自身が理解できるような出現の仕組みを考えている。おそらく、古事記の編纂は神の直系の一族とされていた天皇の権威づけが目的であるがゆえ、ある程度理にかなった説明である必要があったのだと考えられる。

またそうした説明をするにあたって、神々の誕生は日本人の生活の根幹をなしている社会的な結びつきを前提としている。日本人は基本、家族、友人、上司や部下（あるいは先輩や後輩）など上下左右の全ての方向を「関係」というものに常に囲まれ。それを重要視する傾向が強い。これは、中世の武士の主従関係、家族を中心に考えられた家制度などからも分かるように、昔から存在している日本人の特徴の一つと言っていいだろう。こうした特徴が古事記にも表れていたのだと考えられる。

そしてこのことは、日本人は「社会の中に存在している自分」、つまりは「周囲とつながる自分」という観点から自分を定義しているのだと言えないだろうか。自身から見た自分というよりも、周囲から見た自分を想像して自分の行動を決定する。これは、集団の中で生きてきた日本人にとっての一種の処世術だと思う。「一人はみんなのために。」この言葉は日本人の行動原理の一つと呼べるもので、日本の社会を昔から支えてきた気質なのだと感じる。言ってみれば、日本人にとっての「客観」は「周囲の大多数から承認される主観＝常識」なのである。（これはあくまでも持論であるが）

しかしながら、こうした気質は「主体性がない」「周りに流されやすい」などと批判的にみられる面でもある。その一面が権限を持つ一部の集団によって利用された事例は日本の歴史に多く存在したこともあることから（戦争はその代表例）、その気質の長所短所の両方

を念頭に置いておくべきだと思われる。

次に取り上げたいのは、火神誅殺とその結果として起こる、イザナミが黄泉の国から連れ戻しに来たイザナギに激怒する場面についてである。授業では、「火神にわが身を捧げたイザナミは母親の子に対する姿である。それに対し、イザナギは国土の修理固成を妨げた悪しき神として火神をみなし、その障害を除去する目的で迦具土を切り殺した。結果、イザナギが一つ火を灯す姿を見たイザナミは、イザナギが迦具土を殺したのだと悟り、イザナミはイザナギに激怒した。」と話されていた。

このことについて思うのは、古事記では結局どちらを正しいとしているのかということである。イザナミは、わが子を命を賭して産み、その子を切り殺したイザナギを殺そうとするほどわが子のことを想っている。この姿は、わが子に愛情を注ぐ親という日本生来の親の理想像の表れである。対してイザナギの場合は、わが子を切り殺すことから親の姿は確かにみられない。しかし、国土の修理固成の障害となるものを除き、自身の妻を黄泉国まで迎えに行くことから、自分の使命を果たすことを第一に考え、そして自身の妻を愛する夫の姿であるともとれる。国からすれば、そして、自分に与えられた使命を果たそうとした点だけから見れば、イザナギの行動を正しいとしたかもしれない。社会を一番に考える日本人の気質からも納得はいくことである。しかし、わが子に命をかけたイザナミの行動を全く評価しなかったということは、いささか受け入れがたいものがある。イザナギの行動を必要悪とみなすことはできなくもないが、イザナギを善、イザナミを悪と単純に考えるのは、天皇家の史書としては少し分が悪いのではないだろうか。となると、古事記はあくまで史実という体で書かれているのだから、神の行動の正しさなどは、建前では言及しないとしているのだと思われる。ただ、イザナミは黄泉国では「蛆たかれころろきて」とあるように腐乱した醜い姿として書かれているのに対し、イザナギはイザナミの攻撃から傷ひとつ無く逃れたといったように幸運に恵まれていたように書かれている。このことから、読み手にイザナギの行動の方が正しいようにみなすよう、それとなく誘導しようという意図があるとも感じられる。なお、これは余談であるが、イザナミが毎日 1000 人を殺すと宣言したのは、わが子を斬り殺すようなイザナギの国から人を守ろうとする、イザナミのゆがんだ愛情と取れなくもないとも感じる。

最後にケガレやミソギについて考えたいと思う。授業では、「誰もみな明き、清き、直き誠の心を持っているのが元々の姿だという考えが根付いている。その考えをもとにすると、ミソギは自然と寄ってきた悪しきものからわが身を取り出し、あるべき姿に整えることと考えられる。」と話されていた。

このことを基に考えると、日本人は性善説を採用していたことになる。その場合は、確かに自分の行動に対する責任の所在や罪に対する考え方も、西洋的な、または律令上のそれとは異なるものとなる。つまり古来の日本人は、何か悪いことが起こったり悪いことをしてし

まったりすることは、自分になにか悪いものがついているからだと考えたということになる。それは、特に考えの異なる異国の人から見たならば無責任に感じられたことだろう。しかし、社会を一番に考える日本人の気質を考えると、社会を構成する人々が元々悪しき性質をもつ者であると思ってしまうと、人々と関係を持つということにおいて、そうした考えが弊害となってしまうのではないか。もしも西洋のように、個人が社会と同じくらいに重要とする考えが広まっていたのならば、個人の悪い面も、その人の一部として受け入れ、問題なく関係を結ぶことができるだろう。ただ古代の日本の場合、天皇を中心とした個が集団に対して奉仕するというシステムであったため、そうした面は単なる余計なものともみなされることが普通だったのではないだろうか。そして、そういった状況でありながらも、自分の中にどうしても存在する悪い面を、自分とは異なる外部からきたものとみなすことで、自分の属する社会での自身の正当性を保ち続けていたのではないかと考えられる。

以上が自分の「古事記」を読んで感じたことである。このように自分が「古事記」を読んで改めて感じたのは、書物というものは、「古事記」に限らず、おそらくいろいろな読み方ができるということだ。一つの書物につき一つの視点と一つの発見ではなく、一つの書物につき複数の視点と複数の発見が読書の醍醐味であるように思う。今回、自分は「古事記」を「日本人の心」という視点で読んだが、また別の視点で読めば、きっとまた新たな発見が得られるのだろう。だから自分は、しばらくしてから、もう一度「古事記」を読み、そして今度はまた別の発見をしてみたいと思っている。